

2019 年度熊本県立劇場文化活動支援事業 合唱と古楽器によるイタリア初期バロック音楽の響き



クラウディオ・モンテヴェルディ
聖母マリアの夕べの祈り
Claudio Monteverdi Vespro della Beata Vergine



2019 年 8 月 12 日 (月・祝) 14 時開演 (13 時 30 分開場)

熊本県立劇場コンサートホール

指揮 ホアン・マヌエル・クィンターナ

演奏 グループ『葦』ヴェスプロメモリアルアンサンブル

主催 グループ『葦』

後援 熊本県教育委員会・熊本市教育委員会・読売新聞社・FMK・FM791・KAB・KKT・RKK・TKU

メッセージ

モンテヴェルディの *Vespro della Beata Vergine* を初めて聴いた時、その崇高さや壮大さに深い感銘を受け、それ以来私はこの曲に惚れ込んでいます。

たくさんのクラシック音楽の名曲がある中で、モンテヴェルディの *Vespro* は、例えば J.S. バッハのロ短調ミサやモーツァルトのレクイエムのように、西洋音楽でもっとも力強く意味深い最高峰の作品だと思います。またルネサンス音楽と初期バロック音楽のちょうど真ん中に当たるこの作品は、意味深さやスピリチュアリティ、ルネサンス音楽様式の構築性とバロック音楽の情熱の表現、すべてが最高な形で完成しています。

昨年12月に初めて熊本で皆さんと練習した時、ポジティブな驚きを感じました。この難曲への出演者の皆さんの情熱と努力は驚くべきものがあり、遠い文化であるはずなのに、皆さんの心がこの作品の意味するところにとっても近いことが嬉しかったです。そして、この作品のカトリックの伝統について説明したところ、皆さんはすぐにその本質をつかんでくださいました。

愛情と責任を持って全力で努力される出演者の皆さんと共にこの崇高な作品を築き上げるのを名誉に思います。私が皆さんに何かを提供し、そして私は日本文化から多くを受け取ります。それを大変嬉しく思います。

ホアン・マヌエル・クインターナ

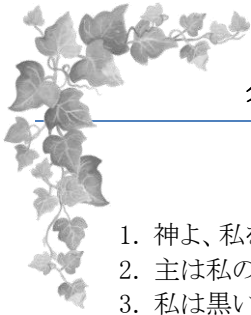
いつの日からかどっぷり九州にはまってしまい、帰国すれば必ず熊本に来ることになっている。42年にもわたって熊本で活動されている古楽アンサンブル、グループ『葦』の皆さんと知り合って、共に楽しい演奏会を重ねて毎回スケールが大きくなってきている。

2013年11月、天正少年使節ゆかりの天草市の河浦コレジオ館のリニューアルオープン式典で、本日演奏するモンテヴェルディの『聖母マリアの夕べの祈り』から *Ave maris stella* (めでたし、海の星) をステージいっぱい出演者で演奏した折に、「いつかこの名曲を全曲演奏できたらどんなに素晴らしいだろう」と語り合ったのがつい先日のような気がする。その後この地は甚大な自然災害に見舞われたにも関わらず、グループ『葦』の皆さんははじめ音楽を生きる糧とされる方々が多大な困難を乗り越えられて2016年にヘンリー・パーセルのオペラ『ダイドーとエネアス』を上演することができた。

いよいよ *Vespro* 全曲に挑戦の時がきた。西洋音楽の中でも最高傑作のひとつ、当時ヨーロッパで最高の音楽家たちの手によって上演された難曲にとりかかる。プロの音楽家が集まって何日か練習するコンサートではなく、誰でもこの音楽作品を心底愛する方はウェルカム。だから調律、ラテン語、歌唱&演奏技術、アンサンブル、信じがたい努力の積み重ねと才能が要求される日々が始まった。そしてマリア様の奇跡のように、こんな難曲を歌える人、演奏できる人々が集まって来た。最終、九州はもとより国内外から総勢51人と聞いている。その奇跡の一つは、ルネ・ヤーコブス率いるコンチェルト・ヴォカレの一員として20年以上共に仕事を続けて来た同朋、音楽的に完璧に信頼できる友人ホアン・マヌエル・クインターナが指揮者として来熊してくれることだと思う。この作品に誰より深く愛情と造詣をもつ世界的なアーティストであるホアン氏は、モンテヴェルディが望んだであろう音楽として新しい息吹を与えようとしている。楽曲のプロポーションや器楽編成、アフエットに指揮者のこの作品にかける誠実な姿勢を聴くことができる。そして、全力投球で指導するホアンに、しっかりと応えるアンサンブルが感動的である。これは私たちの文化だと思う。

2年にわたって築きあげて来た努力と情熱の結晶である本日の *Vespro* 公演に心からお祝い申し上げます。そして、どうか出演者、本日お越し下さった皆さま全員にこの至宝のひとつを楽しんでいただけますように。一緒に参加できることを有り難く思います。

野入志津子



クラウディオ・モンテヴェルディ作曲 *Claudio Monteverdi*

聖母マリアの夕べの祈り *Vespro della Beata Vergine*

1. 神よ、私を助けにおいで下さい *Deus in adiutorium*
2. 主は私の主に言われた *Dixit Dominus*
3. 私は黒い *Nigra sum*
4. 神の僕たち、主をほめたたえよ *Laudate pueri Dominum*
5. あなたは美しい *Pulchra es*
6. 私は喜んだ *Laetatus sum*
7. 二人のセラフィム *Duo Seraphim*
8. 主が家をお建てになるのでなければ *Nisi Dominus*
9. 天よ聞きたまえ *Audi coelum*
10. イエルサレムよ、主をほめよ *Lauda Jerusalem*
11. 「聖母マリアよ、われらのために祈りたまえ」によるソナタ *Sonata sopra 'Sancta Maria ora pro nobis'*
12. アヴェ、海の星よ *Ave maris stella*

休憩 20分

13. Magnificat

私の魂は主をあがめます *Magnificat*
 そして私の霊は喜び *Et exultavit*
 なぜなら神ははした女の卑しさを好意をもって *Quia respexit*
 なぜなら力ある方は *Quia fecit mihi magna*
 主の憐れみは *Et misericordia*
 主はその腕の力を行使され *Fecit potentiam*
 力ある者たちを座から下ろし *Deposuit potentes de sede*
 飢えている者たちを良いもので満たし *Esurientes implevit bonis*
 自分の僕であるイスラエルをお守りに *Suscepit Israel puerum suum,*
 主がお語りになった通りに *Sicut locutus est*
 父と子と聖霊に栄光 *Gloria Patri et Filio, et Spiritui spiritus Sancto.*
 始めにあったように *Sicut erat in principio*



[指揮] ホアン・マヌエル・クィンターナ

合唱と古楽器オーケストラ ● グループ『葦』 ヴェスプロメモリアルアンサンブル

[合唱]

ソプラノ	中川洋子	村中美香	本藤久美	船方公子	中川詩歩	高橋彰子	谷野裕子
アルト	安尾宣子	田尻健	高木悦予	小早川恭子	村橋亮子	古莊恵梨	永原美佐
テナー	栗林孝次	中島誠	北原宏	常定知基	澄川政博	田中雅美	宮原淳 イヴ・トオンジョン
バス	船方浩司	鎌田嗣	浜崎泰史	村中孝浩	松山智浩	村山暁	

[器楽]

バロック・ヴァイオリン	廣末真也(コンサートマスター)	水谷有里(客演)
ヴィオラ・ダ・ガンバ	木村鐘靖	河本基實
バロック・チェロ	井上曜子	
コントラバス	武富祐子(客演)	
リコーダー	古井由紀子	渡辺浩行
コルネット	上野訓子(客演)	得丸幸代
サクバット	宮下宣子(友情出演)	豊田護
リュート	木戸博義	中村孝志(客演)
テオルボ	太田耕平(客演)	吉原正章
アーチリュート	野入志津子(音楽監督)	宇治美里
チェンバロ	津屋式子	
オルガン	魚瀬 Bock 明子	黒田智子
		脇條靖弘
		角田耕治

[舞台監督]

上村清彦

歌詞対訳

1. Deus in adiutorium

Deus in adiutorium meum intende.
Domine ad adiuvandam me festina.

神よ、私を助けにおいで下さい。
主よ、私を急いでお助け下さい。

2. Dixit Dominus

Dixit Dominus Domino meo:
Sede a dextris meis:
Donec ponam inimicos tuos, scabellum pedum tuorum.

主は私の主に言われた。
「私の右側に座れ。
あなたの両足の踏み台として、あなたの敵たちを
私が置く時まで」。

Virgam virtutis tuae emittet Dominus ex Sion.
Dominare in medio inimicorum tuorum.
Tecum principium
in die virtutis tuae
in splendoribus sanctorum sanctorum.
ex utero ante luciferum genui te.

主はシオンから、あなたの力の杖を外に出すだろう。
「あなたの敵たちの直中で支配せよ。
あなたの軍が出される日、
聖人たちの輝きの中で
支配権はあなたと共にある。
明けの明星が出る前に、私は胎からあなたを産んだ」。

Iuravit Dominus, et non poenitebit eum
Tu es sacerdos in aeternum
secundum ordinem Melchisedech.
Dominus a dextris tuis confregit in die irae suae reges.

主は誓われた、そして後悔なさることはない。
メルキゼデクにならって、
あなたは永遠に祭司である。
主は怒りの日に、あなたの右にあって王たちを打ち破られた。

Iudicabit in nationibus implebit ruinas:
conquassabit capita in terra multorum.
De torrente in via bibet:
propterea exaltabit caput.

主は異教徒たちの間で裁き、屍を積み上げるだろう。
主は多くの土地で長たちを打ち砕き、
途中、激流から水を飲み、
それ故、頭を高くあげるだろう。

Gloria Patri et Filio, et Spiritui spiritus Sancto.
Sicut erat in principio et
nunc et semper, et in secula seculorum.
Amen.

父と子と聖霊に栄光。
始めにあったように、
今もまた、これからも。
アーメン

3. Nigra sum

Nigra sum,
sed formosa, filiae Jerusalem.
Ideo dilexit me rex
et introduxit me in cubiculum suum
et dixit mihi:
Surge, amica mea, et veni.
Iam hiems transiit,
imber abiit et recessit,
flores apparuerunt in terra nostra.
Tempus putationis advenit.

私は黒い、
しかし美しい、イエルサレムの娘たちよ。
それ故、王は私を愛し、
私を自分の寝所へ連れて行き、
そして言われた。
「起きよ、愛する人、そして来るのだ。
なぜなら冬は過ぎ去り、
雨は去り、そしてあがり、
花は私たちの土地に咲き、
木を切る季節がやって来たのだから」。

4. Laudate pueri

Laudate pueri Dominum:
laudate nomen Domini.

神の僕たち、主をほめたたえよ。
主の御名をほめたたえよ。

Sit nomen Domini benedictum:
ex hoc nunc et usque in seculum.

今から永遠にいたるまで
主の御名がたたえられるように。

A solis ortu usque ad occasum:
laudabile nomen Domini.
Excelsus super omnes gentes Dominus:
et super coelos gloria eius.

日が昇るところから、日が沈むところまで
主の御名はほめたたえられよ。
主は全ての民の上、高いところにおられる。
そしてその栄光は天の上にある。

Quis sicut Dominus Deus noster
qui in altis habitat:

誰が、天の高みに住まわれる
我々の神である主のようであるのか。

et humilia respicit
in coelo et in terra?

そして天と地で、
卑しいものを心にかけて下さるのか。

Suscitans a terra inopem:
et de stercore erigens pauperum.

地から弱い者を起こし、
汚物の中から貧しい者を救い出して下さるのか。

Ut collocet eum cum principibus:
cum principibus populi sui.

それは自らの民の君主たちと共に
貧しい者を住まわせるため。

Qui habitare facit sterilem in domo:
matrem filiorum laetantem.

主は、子どもたちのにこやかな母親として、
子を産めぬ女を家に住まわせて下さる。

Gloria Patri et Filio, et Spiritui spiritus Sancto.
Sicut erat in principio et
nunc et semper, et in secula seculorum.
Amen.

父と子と聖霊に栄光。
始めにあったように、
今もまた、これからも。
アーメン

5. Pulchra es.

Pulchra es, amica mea,
suavis et decora
filia Jerusalem.
Pulchra es, amica mea,
suavis e decora
sicut Jerusalem,
terribilis ut castrorum acies ordinata.
Averte oculos tuos a me,
quia ipsi me avolare fecerunt.

あなたは美しい、私の愛する人よ。
魅力的で愛らしい
イエルサレムの娘よ。
あなたは美しい、私の愛する人よ。
魅力的で愛らしい。
それはイエルサレムのよう。
あなたは整然とした軍の隊列のように恐ろしい。
私からあなたの目を逸らせて下さい。
その目が私を逃げ去らせたのですから。

6. Laetatus sum

Laetatus sum in his quae dicta sunt mihi:
in domum Domini ibimus.

私は私に言われたことの故に喜んだ。
「主の家へ行こう」。

Stantes erant pedes nostri:
in atriis tuis Jerusalem.

イエルサレムよ、お前の前庭に
私たちは立っていた。

Jerusalem quae aedificatur ut civitas:
cuius participatio eius in idipsum.

イエルサレムよ、お前は都として建てられ
その中は一つに結び付いている

Illuc enim ascenderunt tribus, tribus Domini:
testimonium Israel
ad confitendum nomini Domini.

なぜなら部族が、主の部族がそこにのぼるからだ。
イスラエルには、主の御名をたたえるための
定めがある。

Quia illis sederunt sedes in iudicio:
sedes super domum David .

なぜならそこには裁きの座があるから。
それはダヴィデの家の上にある座。

Rogate quae ad pacem sunt Jerusalem:
et abundantia diligentibus te.

イエルサレムのための平和を求めよ。
そうすればお前を愛する者たちに繁栄がある。

Fiat pax in virtute tua:
et abundantia in turribus tuis.
Propter fratres meos et proximos meos:
loquebar pacem de te:

お前の壁の中に平和があるように。
そうすればお前の宮殿の中に繁栄がある。
私の兄弟姉妹、そして隣人の故に
お前について私は平和を語ろう。

Propter domum Domini Dei nostri:
quaesivi bona tibi.

我らの神である主の家のために
私はお前に恩恵を求めよう。

Gloria Patri et Filio, et Spiritui spiritus Sancto.
Sicut erat in principio et
nunc et semper, et in secula seculorum.
Amen.

父と子と聖霊に栄光。
始めにあったように、
今もまた、これからも。
アーメン

7. Duo Seraphim

Duo Seraphim clamabant alter ad alterum:
Sanctus Dominus Deus Sabaoth.
Plena est omnis terra gloria eius.
Tres sunt, qui testimonium dant in coelo:
Pater, verbum et Spiritus Sanctus.
Et hi tres unum sunt.
Sanctus Dominus Deus Sabaoth.
Plena est omnis terra gloria eius.

二人のセラフィムが互いに叫び交わっていた。
「万軍の主なる神は聖なるかな。
全地は主の栄光に満ちている」。
天には証拠となるものが三つある。
父と御言葉と聖霊である。
そしてこれら三つは一つである。
「万軍の主なる神は聖なるかな。
全地は主の栄光に満ちている」。

8. Nisi Dominus

Nisi Dominus aedificaverit domum:
in vanum laboraverunt qui aedificant eam.

主が家をお建てになるのでなければ、
家を建てる者たちの働きは空しい。

Nisi Dominus custodierit civitatem:
frustra vigilat qui custodit eam.

主が都を見守って下さるのでなければ、
これを守る者不寝番は意味がない。

Vanum est vobis ante lucem surgere:
surgite postquam sederitis qui manducatis panem doloris.

日の出の前に起きるのは、あなた方には空しい。
悲しみのパンを食べる者は、休息をとってから起きよ。

Cum dederit dilectis suis somnum:
ecce haereditas Domini filii
merces fructus ventris.

主は自ら愛する者たちに眠りをお与えになったのだから、
見よ、子どもたちは主を嗣ぐ者である。
胎の実はその報いである。

Sicut sagittae in manu potentis:
ita filii excussorum.

力ある者の手の中の矢のように、
元気に満ちた息子たちがいる

Beatus vir qui implevit desiderium suum ex ipsis:
non confundetur cum loquetur inimicis suis in porta.

彼らのうちで自分の望みを成し遂げた者は幸いである。
彼らは門で敵と論じる時には論破されることはない。

Gloria Patri et Filio, et Spiritui spiritus Sancto.
Sicut erat in principio et
nunc et semper, et in secula seculorum.
Amen.

父と子と聖霊に栄光。
始めにあったように、
今もまた、これからも。
アーメン

9. Audi coelum

Audi coelum verba mea
plena desiderio, et perfusa gaudio.
... Audio.
Dic quaeso mihi:
quae est ista quae consurgens

天よ、憧れに満ち、喜びにあふれる
私の言葉を聞きたまえ。
・・・私は聞く。
私は求める。私に言いたまえ。
曙のように輝きを放ち、私が讃えるために

ut aurora rutilat et benedicam?
... Dicam.
Dic, nam ista pulchra ut luna,
electa ut sol
replet laetitia terras, coelos, maria.
... Maria.
Maria virgo illa dulcis
predicata a Prophetis Ezechiel
porta Orientalis.
... Talis.
Illa sacra, et felix porta
per quam mors fuit expulsa
introduxit autem vita.
... Ita.
Quae semper tutum est medium
inter hominem et Deum
pro culpis remedium.
... Medium.
Omnes hanc ergo sequamur
qua cum gratia mereamur
vitam aeternam consequamur.
... Sequamur.
Praestet nobis Deus
Pater hoc et filius et mater
cuius nomen invocamus
dulce miseris solamen.
... Amen..
Benedicta es virgo Maria
in saeculorum secula.

10. Lauda Jerusalem

Lauda Jerusalem Dominum:
lauda Deum tuum Sion.
Quoniam confortavit seras
portarum tuarum:
benedixit filiis tuis in te.

Qui posuit fines tuos pacem:
et adipe frumenti satiat te.
Qui emittit eloquium suum terrae:
velociter currit sermo eius.

Qui dat nivem sicut lanam:
nebulam sicut cinerem spargit.
Mittit cristallum suum
sicut buccellas:
ante faciem frigoris eius
quis sustinebit?
Emittet verbum suum
et liquefaciet ea:
flabit spiritus eius et fluent aquae.
Qui adnuntiat verbum suum Jacob:
iustitias et iudicia sua Israel.
Non fecit taliter omni nationi:
et iudicia sua
non manifestavit eis.

現われているこの女性は誰か。
・・・私は言おう。
さらに言いたまえ、月のように美しい彼女が、
太陽のように神に選ばれ、
喜びによって天と地と海を満たすと。
・・・海なるマリアよ。
それは優しい処女マリア、
エゼキエルにより預言された
東の門であると。
・・・そのような。
それは聖にして恩寵をもたらす門であると。
それを通して死は追い払われ、
その代わり生命が入って来た。
・・・そのような。
それは常に人間と神との
間にある守り、
罪のための救い。
・・・間にある。
それ故我々は全て、彼女に従おう。
彼女から恩寵と共に得、
永遠の命を皆が得るように。
・・・従おう。
神が我々を救って下さるように。
それ故、御父、御子、御母は、
我々が救いを求めてその名を呼ぶ、
苦しむ者たちにとっての優しい慰め。
・・・アーメン。
処女マリアよ、
あなたは代々限りなく讃えられる。

イエルサレムよ、主をほめよ。
シオンよ、あなたの神をほめよ。
なぜなら神は、あなたの門の
かんぬきを固められたからである。
あなたの中に住む民を祝福されたからである。

神はあなたの国を平和にされた。
そして良質な小麦であなたを満たす。
神は自らの命令を地に発し、
その言葉は速く伝わる。

神は羊毛のような雪を与え、
灰のような霜を撒き、
パン屑のような
氷をお送りになる。
その冷たさを前にして、
誰が耐えることができただろう。
神は自らの言葉を送り出し、
それらを溶かすだろう。
神の息吹きが吹くと水が流れる。
神は自らの言葉をヤコブに示し、
正義と裁きをイスラエルにお示しになる。
神はすべての民に対してそうさったのではなく、
自らの裁きを
彼らに明らかにはなされなかった。

12. Ave maris stella

Ave maris stella,
Dei Mater alma,
Atque semper Virgo
Felix coeli porta.

Sumens illud Ave
Gabrielis ore,
Funda nos in pace
Mutans Evae nomen.

Solve vincula reis,
profer lumen caecis,
mala nostra pelle,
bona cuncta posce.

Monstra te esse matrem,
sumat per te preces,
qui pro nobis natus,
tulit esse tuus.

Virgo singularis,
inter omnes mitis,
nos culpis solutos,
mites fac et castos.

Vitam praesta puram,
iter para tutum,
ut videntes Jesum,
semper collaetemur.

Sit laus Deo Patri,
summo Christo decus,
Spiritu Sancto,
Tribus honor unus.
Amen.

13. Magnificat

Magnificat anima mea Dominum:
Et exultavit spiritus meus
in Deo salutari meo.
Quia respexit humilitatem
ancillae suae:
ecce enim ex hoc beatam me
dicent omnes generationes.
Quia fecit mihi magna
qui potens est:
et sanctum nomen eius.
Et misericordia eius a progenie
in progenies timentibus eum.
Fecit potentiam in brachio suo:
dispersit superbos
mente cordis sui.
Deposuit potentes de sede,
et exaltavit humiles.

アヴェ、海の星よ、
神の優しい御母よ、
さらに、変わることはない処女よ、
恩寵をもたらす天の門よ。

あのアヴェという言葉
ガブリエルの口から受けた方よ、
私たちが平和の中に置きたまえ、
エヴァの名前を変えた方よ。

罪人たちから鎖を解き放ち、
盲人たちに光を与え、
私たちの悪を追い遣り、
すべての善を求めたまえ。

あなたが母であることを示したまえ。
あなたを通じて主は祈りを受けたまえ。
私たちのために生れた方は、
あなたの息子であると述べられた。

比類なき処女よ、
全ての人の中で最も恵み深い、
私たちが罪から解放し、
穏やかで汚れない者になしたまえ。

正しい生活を示し、
安全な道を整えたまえ。
私たちがイエスに会って
常に共に喜ぶように。

父なる神に賛美、
至高のキリストに誉れ、
聖霊にも誉れがあるように。
一つの榮譽は三つのものである。
アーメン。

私の魂は主をあがめます。
そして、私の救い主である神の故に、
私の霊は喜びました。
なぜなら神は御自分のはした女の卑しさを、
好意をもって御覧になったからなのです。
さあこれにより、私は幸せな女であると、
必ずすべての世代は言うでしょう。
何故なら力ある方は、
私に大いなることをなされたのですから。
そして主の御名は聖なるものであり、
主の憐れみは子々孫々に至るまで、
主を恐れる者たちのものなのです。
主はその腕の力を行使され、
その心の高慢な者たちを
追い払いになり、
力ある者たちを座から下ろし、
卑しい者たちを高くされたのです。

Esurientes implevit bonis:
et divites dimisit inanes.

飢えている者たちを良いもので満たし、
豊かな者たちを、何も持たない者として放たれました。

Suscepit Israel puerum suum,
recordatus misericordiae suae.
Sicut locutus est
ad patres nostros, Abraham,
et semini eius in saecula.

自分の僕であるイスラエルをお守りになり、
自分の憐れみを覚えておられました。
私たちの父祖であるアブラハム、
そして彼の子孫に永遠に
主がお語りになった通りにです。

Gloria Patri et Filio, et Spiritui spiritus Sancto.
Sicut erat in principio et
nunc et semper, et in secula seculorum.
Amen.

父と子と聖霊に栄光。
始めにあったように、
今もまた、これからも。
アーメン

(訳詞:梅津教孝)

クラウディオ・モンテヴェルディ作曲『聖母マリアの夕べの祈り Vespro della Beata Vergine』

初期バロック音楽の大家モンテヴェルディ(Claudio Monteverdi, 1567-1643)の『聖母マリアの夕べの祈り(ヴェスプロ)』は西洋音楽史に燦然と輝く金字塔である。その壮麗な響きはプロ・アマを問わず多くの音楽家を惹きつけ、400年の時空を超えて世界中の音楽愛好家を虜にしてきた。楽曲の規模の大きさと古楽特有の表現法や演奏習慣、古楽器によるオーケストラの必要性などで、その上演には多くの困難が伴い、取り上げることを諦める関係者も多い中、このたび地方の古楽アンサンブルであるグループ『葦』が、震災の復興への祈りとともにこの大曲に挑むことには、日本の音楽文化上極めて大きな意義がある。今年で結成42周年を迎えるグループ『葦』は、地元での地味な活動を主としながらも、一貫して目を世界に向け、著名な音楽家を指導者に仰いで質の高い演奏活動を行ってきた。今回は音楽監督にオランダ、ドイツで活躍するリュート奏者野入志津子氏、指揮にフランスを中心に多くの実績を持つホアン・マヌエル・クウインターナ氏を迎え、国内外から駆けつけた古楽演奏家とともに2年の歳月をかけて本公演に向けた準備を重ねてきた。奇しくもこの曲がこの日のために想定されたであろう聖母マリア被昇天の日(8月15日)と亡き人々に想いを寄せる日本の盆会とも日が近い本日、この曲がここ熊本で演奏されることは、深い祈りとともに復興への力強い一歩を記すものとなるであろう。

【クラウディオ・モンテヴェルディについて】

クラウディオ・モンテヴェルディは1567年にイタリアのクレモナに医師の息子として生まれた。早期より音楽の才能を現し、地元の音楽家マルク・アントニオ・インジェネリに師事して15歳には最初の曲集『3声モテト集』(1582)を、翌年には『宗教的マドリガーレ集』を出版している。1590年、彼はヴィオール奏者としてマントヴァのゴンザーガ家に伺候し、以後20年近くこの家に仕えることになる。ゴンザーガ家はルネサンス文化を推進した名家のひとつで、モンテヴェルディが仕えたのは北イタリアでの文化覇権を狙う豪華好みのヴィンチェンツォ公であった。1602年に宮廷楽長に昇進した前後から、モンテヴェルディは続々と傑作を発表する。マドリガーレ集第3巻(1603)、第4巻(1604)、第5巻(1605)、オペラ『オルフェオ』(1607)『アリアンナ』(1608)、舞踊劇『情け知らずの女たちのバッコ』(1608)などこの時代の作品はいずれもルネサンス・ポリフォニーの古いくびきを離れて、新しいバロック的表現を確立したものとして音楽史上名高いものである。17世紀の初頭にはモンテヴェルディの名声はすでに北イタリアであまねく知れ渡っていたが、その新しい方向性に危惧を感じる保守層もいた。アルトゥージを中心とする一派はモンテヴェルディの不協和音の使用について批判する文書を公開し、世に言う「モンテヴェルディー・アルトゥージ論争」を引き起こす。それらに対峙したモンテヴェルディは、バロックの理念を象徴する画期的な回答を提示する。すなわち、これまでのルネサンスの音楽技法は協和音を主軸とした「第一の作法」であったのに対し、自分たちの技法は歌詞の表出を重んじる「第二の作法」であるというものである。もとよりモンテヴェルディの初期の作品群を見れば、彼がいかにか「第一の作法」に通暁していたかは自明のことであるが、彼が目指したのはそれを超えた新しい真に人間的な様式であった。彼が生涯を通して書き綴った9巻からなるマドリガーレ集は、音楽様式がいかにかルネサンスからバロックへ移行していったかを示しているが、それをいわば並べて同時に提示したのが1610年に合本として出版された『聖母マリアのミサ』と『ヴェスプロ』である。特に後半の『ヴェスプロ』は、オペラやマドリガーレなど世俗音楽の手法が、宗教音楽においていかにか新しい表現となり得るかを示した点で、音楽史上きわめて画期的な作品であった。

この作曲家としての栄光の日々の陰で、彼の個人生活は苦渋に満ちたものだった。1607年9月、妻クラウディアが幼い2人の息子を残して病死する。まさに妻を亡くすオルフェオの物語を書いている最中に病に倒れ衰弱していく妻をモンテヴェルディはどのような気持ちで見ていることだろう。その上に過重な職務がのしかかる。1608年にはゴンザーガ家の嫡子フランチェスコの婚礼があり、フィレンツェに並々ならぬライバル心を燃やすヴィンチェンツォ公は、モンテヴェルディに矢継ぎ早に作曲・上演の指令を出す。『アリアーナ』や『情け知らずの女たちのバッコ』はいわばそのおかげで現在視聴することができるわけだが、そのスケジュールたるや殺人的なものであった。さらに13歳から自宅で養育してきた優秀なソプラノで『アリアーナ』の主演を歌う予定であったカテリーナ・マルティネッリが公演の直前に天然痘で急逝する。『アリアーナ』は彼女を想定して書かれたと言われており、モンテヴェルディの落胆ぶりは想像するに余りある。とはいえ、公演はいずれも成功を収め、ゴンザーガ家の面目は躍如たるものであった。

もともとマントヴァ宮廷での俸給は十分でなく、モンテヴェルディは歌手であった妻の収入と故郷の父の援助で何とかやりくりしていたのであるが、この度の成功に対する恩賞は何もなかった。怒り心頭でクレモナに帰ったモンテヴェルディに帰任を促す手紙を書いた宮廷財務官キエッポは、けんもほろろの返事を受け取ることになる：

「貴公はこれよりもっと明白な証拠をとお望みでしょうか。何も新しいことをしなかったと言えるマルコ・ダ・ガリアーノ氏に200スクードを賜り、なしうるすべてをなしたこの私は何も賜っていないではありませんか。このことをご存じならば、そしてまた私がマントヴァでいかに病みかつ不幸であるかをご存じならば、どうか聡明なキエッポ殿、神の愛のために、私が閣下のもとから気持ちよくお暇をいただけますようお願いいたします。」

この手紙が功を奏したのか、モンテヴェルディは俸給と年金の増額を提案され、マントヴァに留まることになった。とはいえマントヴァへの不満がくすぶり続けたことには変わりがない。1610年、これまでオペラやマドリガーレなど世俗音楽にその名声が集中していた彼にしては異例なことに、大規模なミサ曲と晩課をヴェネツィアから出版した。時のローマ教皇パウロ5世に献じられたその作品を携えて彼はローマに出立する。目的は息子フランチェスコのために法王庁附属神学校の奨学金を得ることであったが、自らの教会音楽家としてのポストを得るがための就職活動であったとも伝えられている。当時のモンテヴェルディの境遇を考えれば無理からぬことである。しかし結果はフランチェスコの奨学金は叶わず、ミサと晩課も演奏されないままであった。モンテヴェルディの不運は続き、1612年ヴィンチェンツォが死去して、フランチェスコの代になると、モンテヴェルディはあっさり解雇されてしまう。モンテヴェルディは再びクレモナの父の元に身を寄せるしかすべはなく、不遇の日々を過ごす。しかし1年後の1613年、モンテヴェルディは空席となったヴェネツィアのサンマルコ大聖堂の楽長に選任されることになる。『ヴェスプロ』の真価を最もよく理解するヴェネツィア、次代のオペラの中心地となるヴェネツィアに、最もふさわしい人物としてモンテヴェルディは赴任し、以後30年にわたって名声に包まれてそこで生涯を全うする。

【晩課(夕べの祈り)について】

カトリックの典礼音楽としてはミサ曲がよく知られているが、ミサと同様に重視されるのが聖務日課の中の晩課(夕べの祈り)である。聖務日課は1日のうちの一定の時刻に聖書朗読や詩篇唱和、賛歌からなる祈りを唱える礼拝様式で、トレントの公会議(1545~1563)後では、朝課(夜半)、一時課(早朝)、三時課(午前9時)、六時課(12時)、九時課(午後3時)、晩課(夕方)、終課(夜)があり、中でも夕方日が沈んだ時に行う晩課はその日に受けた恵みと行なった善に感謝する主要時課とされていた。特に日曜日や守護聖人の祝日などには朝夕に大きな礼拝が行われており、17世紀初頭のヴェネツィアでは3時間を越える晩課も営まれていたという。晩課の構成は、先唱と応唱、前後にアンティフォナを持つ5つの詩篇唱、イムヌス、マニフィカトとなっており、詩篇唱の後のアンティフォナは別の曲に差し替えられる場合もあった。晩課はミサに次ぐ重要な音楽形式であり、多くの作曲家が手がけたと思われるが、伝えられる中ではモンテヴェルディのこの聖母マリアに捧げられた晩課が音楽史上最も有名である。

【モンテヴェルディの『ヴェスプロ』をめぐって】

教会暦においては聖母マリアの祝日は年に14日あり、重要な祝日として大きなミサや晩課が営まれる。教会音楽の習慣として、祝日によって採用するアンティフォナと詩篇の組み合わせに制約があるが、モンテヴェルディのこの作品はそれに合致しない部分もあるため、いつ演奏されたかについては諸説ある。最も有力なのは8月15日の聖母マリアの被昇天の祝日とされているが、嫡子フランチェスコの娘の誕生を祝って受胎告知の祝日(3月25日)のために作曲されたという説もあり、また構成が通常の晩課と異なっていることから、特定の祝日ではなく、いくつかの機会のために作曲されたものを一つにまとめたとする説もある。

モンテヴェルディがなぜこの時期に宗教的大作を書いたかについては、上述のように教会への転職を考えてのことという説が有力視されており、ローマ教皇庁またはヴェネツィア、あるいはマントヴァの聖バルバラ教会の地位を望んだのではないと言われていた。第二の作法を駆使した華麗な響きは当時のヴェネツィアの音楽風土に最も適合しており、海を契機とした「アヴェ、海の星よ」が入っていること、またヴェネツィアで盛んだった複合唱が多く取り入れられていること等から、ローマ教皇に献じたとはいえ、ヴェネツィアへの志向が強かったと推測される。実際モンテヴェルディは3年後の1613年にサンマルコ大聖堂楽長に選任される。その採用時に演奏した曲は異なっていたものの、出版譜も採用審査の参考とされていたとも言われ、そうであればこの曲集が就職活動に果たした役割は大きかったと言えよう。しかしこの作品が上演された形跡は見つかっておらず、初演がどのような形で行われたかは不明である。

この作品は聖母マリアに捧げられたものであるが、聖母マリアとは関係のない曲も数曲含まれている。雅歌からとられた「私は黒い」や三位一体を主題とした「2人のセラフィム」などがそれである。それらは全曲の中でも特に第二の作法的であり、オペラやモノディを思わせるが、一方全体は教会音楽の伝統である定旋律 Cantus firmus に基づいている古風な面もあり、響きとしても様式としてもまさに万華鏡のような広がりがある。さらに詩篇唱の後のアンティフォナを別の曲で代替してもよいことから、他作曲家の作品も含む器楽曲などが挿入されることもある。それらについては楽譜上に明確な指示がないところから種々意見が分かれる点でもあるが、本公演ではモンテヴェルディの作品のみによるバーレット版に基づいて演奏される。

【使用される楽器について】

パート譜で出版された原典の表紙には「宗教的コンチェルトを伴った複数声部による晩課、礼拝堂もしくは王宮室内において演奏されるための *Vesperae pluribus decantandae, CUM NONNULLIS SACRIS CONCENTIBUS, ad Sacella sive Principium Cubicula accommodata*」とあり、「コンチェルト」という用語がバロック初期には声楽にも使われたとはいえ、器楽の重要性は十分に意識されていたものと思われる。実際『オルフェオ』では40の楽器を細かく指定してオーケストラの効果を劇的に使用していたモンテヴェルディであるから、この作品についても器楽が重視されていることは容易に想像がつく。楽譜冒頭で作曲者が指定しているのは以下の楽器である：

violino da braccio (ヴァイオリン)	viola da braccio (ヴィオラ～チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ)
contrabasso da gamba (ヴィオローネ)	cornetto (コルネット)
trombone (サクバット)	trombone doppio (バス・サクバット)
fifara (フルート)	pifara (シヨーム)
flauto (リコーダー)	organo (オルガン)

これらに通奏低音楽器(リュート、アーチリュート、テオルボ、オルガン、チェンバロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ等)が入る。リトルネロと呼ばれる楽曲の間奏部分や独立したソナタでの演奏のほか、当時の演奏習慣として声楽パートを適宜重複する場合もあり、器楽の響きは常に空間を満たしていると言ってよいだろう。楽器の選定やパートの重複方法などは演奏者に任されている部分も多い。当時の楽器とその演奏家をそろえるのは、特に日本においては至難の技だが、本公演では望み得る第一線の演奏家が参集しており、オリジナルの響きが堪能できる。

【各楽曲について】

1. 先唱と応唱(6声の合唱と合奏)

短い先唱(*Deus in adjutorium meum intende*)に続いて、華やかなファンファーレを伴った応唱(*Domine ad adjuvandum me festina*)で全曲が開始される。このファンファーレは『オルフェオ』冒頭トッカータからの転用であり、ゴンザーガ家のファンファーレとも呼ばれる。

2. Dixit Dominus(主は言われた:6声の合唱と合奏)

器楽のリトルネロをはさみながら、様々な様式一模倣、3度や6度の積み重ね、全声部同一和音による詩篇唱型朗唱、リズムと拍子の頻繁な交代などが華麗に繰り広げられる。

3. Nigra sum(私は黒い:テノールソロ)

ソロモンの雅歌からとられ男女の恋愛を歌ったモテトで、モノディ様式で書かれたオペラのアリアのごとき趣きを持つ。「起きよ surge」という言葉が音階的に上昇してゆく音型で表され、音画的である。

4. Laudate pueri (神の僕たち、主をほめたたえよ: 8 声の合唱と通奏低音)

定旋律が全体を支えつつ、模倣や3度のハーモニー、細かい名人芸的なパッセージで人声が響宴を繰り広げる。8声の力強いハーモニーは最後は2声に収斂していく。

5. Pulchra es (あなたは美しい、私の愛する人よ: 2重唱)

詞は第3曲と同じ雅歌からとられており、通奏低音とソプラノの2重唱が、付点リズムを伴って軽やかに愛を歌い上げる。やはりオペラの一場面のような印象である。

6. Laetatus sum (私は私に言われたことの故に喜んだ: 6 声の合唱)

低音がオスティナート風に刻むリズムが特徴的な曲である。自在に変化する声部の組み合わせが喜びを表現し、栄唱(Gloria patri)へ達する。

7. Duo Seraphim (二人のセラフィム: 2重唱から3重唱)

セラフィムは最上位の天使である。「二人のセラフィムが互いに叫び交わしていた」という第1行目の詞のように、2人の天使が呼び交わす様子が華麗な技巧を伴って歌われる。後半の「天には証拠となるものが三つある」の行からもう1声が入り、聖三位一体を歌う。

8. Nisi Dominus (主が家をお建てになるのでなければ: 10 声の合唱)

5声ずつの2重合唱による力強い作品である。ヴェネツィアの複合唱(Cori spezzati)の伝統を踏まえた作曲法で、2つに分割された合唱が、呼応を繰り返しつつ、最後は一緒になってクライマックスを形成する。

9. Audi coelum (天よ、私の言葉を聞きたまえ: 2人のテノールによるエコーから 6 声の合唱)

エコー(こだまの技法)はルネサンスからバロックにかけてよく使われた一種の模倣であるが、宗教曲の場合、霊的な雰囲気醸し出す。曲の中盤「それ故我々は全て、彼女に従おう Omnes hanc ergo sequamur」から6声部になり、聖母マリアを讃える。

10. Lauda Jerusalem (イエルサレムよ、主をほめよ: 7 声合唱)

テノールで歌われる定旋律をはさんで、3声部ずつの合唱が掛け合いつつ、栄唱(Gloria patri)で荘厳に締めくくられる。ここでも複合唱の効果が存分に使われている。

11. Sonata sopra Sancta Maria, ora pro nobis (ソナタ「聖マリアよ、私たちのために祈ってください」: 8声の器楽と斉唱)

ヴァイオリン(2)、コルネット(2)、サクソバット(2)、バス・サクソバット、ヴィオラ・ダ・ガンバの合奏にソプラノの斉唱が加わったソナタ。2本ずつのヴァイオリン、コルネット、サクソバットは組みになって模倣を展開するとともに、相互に絡み合う。その間にソプラノの「聖マリアよ、私たちのために祈ってください Sancta Maria, ora pro nobis」が断続的に11回繰り返される。ソプラノの単純さが器楽の多彩さを際立たせる先進的なオーケストラ曲である。

12. Ave maris stella (アヴェ、海の星よ: 8声の合唱とソロ、5声の器楽)

7節から成るイムヌス(賛歌)であり、聖母マリアを海の星になぞらえて崇敬の思いを歌う。元の賛歌の起源は不明であるが、海の星は宵の明星であるとも伝えられ、教会においては聖母マリアの象徴とされた。海に関連した詞であることから、水の都ヴェネツィアを意識してのモンテヴェルディの選曲であるとも言われた。全体は器楽による5回のリトルネロをはさんでポリフォニックに展開する。

13. Magnificat (マニフィカト: 7 声の合唱と6声の器楽)

キリストを身ごもったマリアの感動を歌うマニフィカトは古来多くの作曲家によって取り上げられてきた。モンテヴェルディは『ヴェスプロ』に器楽伴奏付きの7声のもと通奏低音のみの6声の2曲のマニフィカトを掲載している。これは演奏される場所一表紙にあるように礼拝堂か王侯の広間かなどで融通が利くようにという配慮であろう。本日は7声の版が演奏される。全体は詞節に対応した12の部分から成り、本曲中で使われた様々な技法が各節で展開され、終曲を飾るにふさわしい壮大さで力強く締めくくられる。

奏者ご紹介



●ホアン・マヌエル・クワインターナ/ 指揮 Juan Manuel Quintana / Direttore d'orchestra

アルゼンチンのブエノスアイレス生まれ。1987年、故郷の街でリカルド・マサンに師事してヴィオラ・ダ・ガンバを始めた。1991年にスイスのジュネーブ音楽院でアリアンヌ・モレットに師事。一年後、バーゼル・スコラ・カントルムに入学、パウロ・パンドルフォのクラスに入る。1995~1997年、パリ国立音楽院にて、クリストフ・コアンに師事しガンバ奏法を完結した。1995年、コンセイユ・デュ・レウープ Conseil de l'Europe とクロード・ニコラス・レドゥー研究所 Institut Claude Nicolas Ledoux にて教鞭を執る。

1995年以来、エスペリオンxx、グルノーブル・ルーヴル宮音楽隊、コンチェルト・ヴォカール、ローザンヌ・ヴォーカル・アンサンブル、レ・タラン・リリック、カペラ・メディテラニアなどヨーロッパで最も有名なバロックアンサンブルやオーケストラと共演、ヨーロッパの主要なステージで演奏：シャンゼリゼ劇場、オペラ座、シテ・ドゥ・ラ・ムジーク（パリ）、エクサンプロヴァンス音楽祭、リヨンオペラ座、モンペリエオペラ座、ロイヤル・アルバート・ホール、バービカン・センター（ロンドン）、ザルツブルク音楽祭、インスブルック古楽祭、ウィーン国立歌劇場、チューリッヒオペラ座、ラ・フォル・ジュルネ・ドゥ・ナント、アリアーガ劇場（ビルバオ）、王宮劇場（マドリッド）、カタルーニャ音楽堂（バルセロナ）、国立オペラ劇場（ブリュッセル）、国立劇場（ベルリン）、オペラ座（アムステルダム）。

ハルモニア・ムンディ・フランスからリリースされたヨハン・セバスチャン・バッハのヴィオラ・ダ・ガンバソナタ集、マラン・マレ組曲集、ディートリッヒ・ブクステフーデのトリオ・ソナタのCDは国際批評家から賞賛を受け、ディアパソン金賞、Choc du Monde de la Musiqueを受賞、クラシック賞（カンヌ）賞にノミネートされた。ライブ録音は多数にわたる。

ヴィオラ・ダ・ガンバの演奏についての深い知識と歴史的奏法の経験を教授するために、スペイン、イタリア、ドイツ、南米に定期的に招聘されている。ソリストとしての主な演奏活動：パリ市立劇場、アベス劇場、ラ・ロック＝ダンテロン音楽祭、ラ・フォル・ジュルネ（ナント、リスボン、ビルバオ）、ベルリン楽器博物館、フランス国营ラジオ局。

1999年から2005年まで、マルク・ミンコフスキーの助手として“ポッペアの戴冠”（エクス&プロヴァンス、ウィーン、パリ）、“ジュリオ・チェーザレ”（アムステルダム、パリ、ウィーン、チューリッヒ）を上演。2000年にレ・ミュージエンヌ・デュ・ルーブルをアジア公演で、2013年にはグルノーブルとリヨンで指揮。それ以来、アルゼンチンでは指揮者としての活動も活発に行う。復活“、”ロドリンダ”、“アグリピーナ”（ヘンデル）、“ポッペアの戴冠”、“ウリッセの帰還”（モンテヴェルディ）2009年、ブエノス・アイレス市から、10年間における最高の器楽奏者としてコネックス Konex 賞を受賞。

●野入志津子/ 音楽監督・アーチリュート Shizuko Noiri / Direttore Musicale, Arciliuto

京都生まれ。同志社女子大学音楽学科（音楽学専攻）卒業。在学中よりリュートを岡本一郎氏に師事。京都音楽協会賞受賞。リュートとルネサンス、バロック音楽を学び深めるためにバーゼルのスコラ・カントルムでオイゲン・ドンボアとホプキンソン・スミスに師事、1991年ソリストディプロマ。アムステルダムを拠点に活動している。古楽界の巨匠ルネ・ヤーコブスの専属リュート奏者として20年以上にわたりオペラやオラトリオの上演を続けている。主な活動はインスブルック古楽祭（オーストリア）、エクサン・プロヴァンス国際音楽祭（フランス）シャンゼリゼ劇場（パリ）、ベルリン国立歌劇場、ウィーン国立歌劇場、東京オペラシティ（鈴木雅明指揮）など。



アンサンブル“レ・プレジール・ドゥ・パルナッス Les Plaisirs du Parnasse”のメンバーであり、世界各国でソリスト及び通奏低音奏者としてアンナー・ビルスマ、コンチェルト・ヴォカール、イ・ムジチ合奏団、フライブルク・バロック・オーケストラ、ベルリン古楽アカデミー、アンサンブル415、コンチェルト・ケルン、コレギウム1704、バッハ・コレギウム・ジャパンなど先導的なアーティストやアンサンブルと活動している。1997~1999年、古楽情報誌アントレに『演奏家のためのバロック音楽 17・18世紀イタリアの音楽～通奏低音法』を中心にを23回にわたり連載。エクサンプロヴァンス、チェコ、イスラエルでマスターコースを行い、2015年より東京芸術大学古楽科で講習会を行う。

ディスコグラフィー：フィリップス（イ・ムジチ合奏団と）、ハルモニア・ムンディ・フランス（ルネ・ヤーコブス指揮）、WDR、BIS、Symphonia、Zig-Zagなどのレーベルに録音。ソロのCDはレグルスから「様々な作曲家によるリュート曲集（カステリオーノ編）」「G.A. Casteliono, Intabolatura de Leuto」「ザンボーニ：リュート・ソナタ集 ルッカ 1718年」「Giovanni Zamboni, Sonate d'Intavolatura di Leuro」をリリース。レコード芸術誌特選盤。2017年秋にソロアルバム「薫る風-新しい様式によるリュートのためのトッカータと舞曲」「aure nove Toccate e danze per liuto in stile moderno」を acoustic rivive よりニューリリース。HPは <https://shizukonoiri.com/>



●上野訓子/ コルネット Kuniko Ueno / Cornetto

コルネットを濱田芳道、B.ディッキー、W.ドンゴワ、J.テュベリの各氏に師事。スイス・バーゼルスコラカントルムにて学んだ後、渡仏。パリ市高等音楽院古楽科にて、コルネット奏者として同音楽院では初のディプロマ取得者として満場一致で卒業。アンサンブル・ラ・フェニーチェ Ensemble La Fenice などヨーロッパの主要古楽アンサンブルのメンバーとして、各地のコンサートやオペラ、録音、テレビに出演。近年にはバッハ・コレギウム・ジャパン定期演奏会、CD録音に参加、またイタリア古楽協会主宰のセミナーでは「ヒストリカル・インプロヴィゼーション」をテーマに指導を行うなど、多様な活動を展開している。



●宮下 宣子/ サクバット Nobuko Miyashita/Tronbone

東京藝術大学及び同大学院修了。ケルン音大を最優秀で卒業。大学在学中より日本オーケストラ界初の女性金管奏者として、新日本フィルハーモニー交響楽団に首席奏者として入団、約 40 年間に渡り在籍。伊藤清、B.スローカー、F.ポイトゥリノ、C.トゥート、濱田芳通の各氏に師事。

日本人初のサクバット・リサイタル、及びソアルバム CD「サクバットの決意」「歌うサクバット」「サクバットの祈り」をリリース、好評を博す。スライドトランペット、クラシカルトロンボーンを用いた様々な活動も積極的に行っている。また古楽金管楽器の日本普及にも尽力、年一回古楽金管セミナーを開催中。

古楽金管アンサンブル「ANGELICO」主宰。日本トロンボーン協会理事 <http://sackbut1.com/>



●廣末 真也/ バロック・ヴァイオリン,コンサートマスター Shinya Hirose/_Baroque Violin

福岡県出身福岡教育大学卒業、同大学院を修了。桐朋学園大学音楽学部研究科古楽器専攻修了。ヴァイオリンを市澄子、原田大志、松野弘明、木野雅之、バロックヴァイオリンを戸田薫、寺神戸亮の各氏に師事。公開セミナー、マスタークラス等で、シギスバルト・クイケン、パウル・エレラ、エマニュエル・ジラルール、鈴木秀美、若松夏美の各氏に指導を受ける。九州各地、関東で演奏活動を行う。

2014 年より“コンセール・エクストラ福岡古楽シリーズ”を主宰。古楽器(オリジナル楽器)での演奏活動も積極的に行い、第 1 回公演よりコンサートマスターを務める。クラシカル・プレイヤーズ東京、響ホール室内合奏団団員



●太田 耕平/ テオルボ Kohei Ohta/Tiorba

福岡市出身。Forest-Hill Music Academy にて松下隆二氏に師事し、クラシックギターを始める。ステファノ・グロンドーナ氏のギターリサイタルに感銘を受け、2001 年よりイタリアに渡り 2007 年 9 月、ヴィチエンツァ国立音楽大学ギター科を最高点首席にて卒業。2007 年 11 月よりドイツはフランクフルトに移住、西洋音楽の原点である古楽の追求を図るべく、フランクフルト国立音楽大学古楽専門学部にてリュートを今村泰典氏に、中世・ルネサンス音楽をミロ・マクバー氏に師事。当時の演奏法やネウマ譜の読解、バロック舞踏など中世からバロックまでの広範な演奏スタイルを学ぶ。在学時より、リュート奏者としてソロ、アンサンブル、オーケストラとの共演などの活動始める。2014 年 7 月、フランクフルト国立音楽大学リュート科を卒業。

近年、台湾の Yun-Schen バロックアンサンブルとの台湾全国ツアー公演への共演や、中国人ヴァイオリニスト (HongXia Cui, Fan Li) 二人と結成した Trio La Pace (トリオ ラ・パーチェ) として中国成都での公演など、アジア圏を中心に活動の幅を広げる。2016 年 10 月、15 年のヨーロッパ生活にピリオドを打ち、完全帰国。福岡を拠点にギター・リュート奏者として演奏活動やレッスン活動、音楽講座の主催、演奏会の企画など多岐にわたる活動を開始している。



●ヴェスプロメモリアルアンサンブル

2017 年より国内外から本作品を愛する人々が集い結成。2018 年秋には野入氏の友人で古楽に深い造詣を持つソプラノ歌手マリア・クリスティーナ・キール氏がこの情熱をかって下さり来熊、歌と合唱についての意義深いレッスンが実現した。現在は本公演を目指して敬愛する素晴らしい音楽家である指揮者クインターナ氏、また音楽監督野入氏の音楽への熱い想いに導かれ、大きな力を惜しみなく与えてくれるメンバーと一丸となって練習に励んでいる。メンバーは熊本、鹿児島、大分、福岡、山口、京都、神戸、東京、ドイツ、フランス、オランダ、スペイン。

●グループ『葦』

1977 年熊本で結成の古楽アンサンブル。ヨーロッパ中世、ルネッサンス、バロック期の作品を演奏。九州各地で開催の音楽祭出演、自主的な演奏会を主催、また古楽器に適した響きの良い教会や歴史的建造物での音楽会に出演し好評を得た。九州と縁の深い天正遣欧少年使節に関する演奏会の機会も多くその活動には情熱を持ってあつている。2011 年からリュート奏者・野入氏をお迎えし演奏会を開催。2013 年熊本県天草市河浦町の天草コレジヨ館でコレジヨの仲間と共に市主催記念コンサート出演、2014 年「天正遣欧少年使節によせる音楽の旅」、2016 年ヘンリー・パーセルのオペラ『ダイドとエネアス』上演。2019 年 8 月結成 42 周年を迎えた。

